

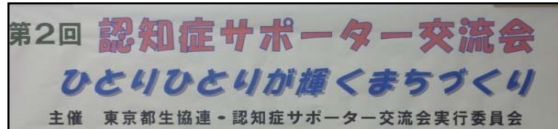
認知症サポーター交流会開催報告

日時：2011年2月23日 13:00～16:00

会場：東京都生協連会館 3階

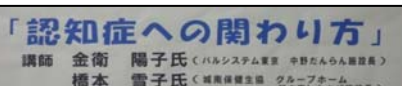
主催：東京都生協連・認知症サポーター交流会実行委員会

参加：7会員 36名



認知症サポーター養成講座を受講しオレンジリング取得者を対象に日頃のサポーターとしての活動を持ち寄ると共に、地域の中でのサポーターの役割や出来る事を学び、誰もが安心して暮らすことのできるまちづくりにつなげることを目的に交流会を開催しました。

実践報告 「認知症への関わり方」



◆「パルシステム東京 中野陽だまり だんらん」 施設長・金衛陽子さん

陽だまり・だんらんは、定員 12 名の小規模施設で、おひとりお一人の個性に合ったケアを行い、日中施設で過ごし夕方ご自宅にお送りする通所介護施設です。24 時間ケアではないのでご家族との関わりや近隣の関わりが多い施設です。認知症の方が家に帰ってからの行動で、徘徊やお店で困ったことを起こしてしまうことがあり地域で見守っていくことの大切さが話されました。

お店で万引き？

認知症の人は、買おうと思って商品を手にしてもほかの商品を見ている間に手にしているものを忘れてしまう。

認知症の人へ

思いが伝わらなかつたら

何をしなければいけないか、理解ができていないので普通に話したり、怒ったりしないで、女優、俳優になったつもりで話してみよう

地域で見守る…サポーターの出番！

サポーターだから、特別なことをするのではなくちょっとおかしいかなと思ったら声をかけてみよう！



◆「城南保健生協グループホーム 虹の家しおかぜ」 施設長・橋本雪子さん

～認知症患者さんとのコミュニケーション 人の気持ちに寄り添って～

24 時間、生活の場であるグループホームでの認知症の方とのコミュニケーションの取り方について話がありました。グループホームは「認知症になっても町の中で安心して暮らしたい」「自分らしさを保ちながら自由に心豊かな暮らしを送りたい」本人はもとより、家族やケア関係者の切な願いから認知症の人を丸ごと受け止め寄り添いながら生きることを支える場。

グループホームは

「入所施設」ではなく、入居者と職員と一緒に暮らす家！

何を支援しているか？

「生活」の支援

コミュニケーションには…

言語的と非言語的、二通りのコミュニケーションがある。



良いコミュニケーションは

親しみ、安心、心地よさをもたらす

悪いコミュニケーションは

相手に対し不快、怒りの感情を起こさせる

コミュニケーションの基本姿勢

- ①同じ目線の高さで話し、聞く
- ②温かいまなざしと優しいしぐさ
- ③相手の気持ちを受け入れて、聞き上手になる
- ④人生の先輩として尊敬の気持ちで接し、自尊心を傷つけない
- ⑤言葉、行動の背景にあることを理解する。



良いコミュニケーションとは

- ①本人と私たちの世界のズレを理解する。
- ②非言動的（言葉以外）のコミュニケーションを大切にする。
- ③人生の先輩から学ぶ姿勢の大切さ
- ④輝いていた時代、かけがえのないものをコミュニケーションに盛り込む
- ⑤行動障害の背景にある心の状態を理解する
- ⑥不安や混乱の要因を五感で感じ取り対応する
- ⑦物忘れはあるが、「情緒」、感情は豊かな人として関わる

演習 「模擬演技による対応訓練」

～認知症の人の心を感じて理解するプログラム～

◆NPO 法人 ACT アビリティクラブたすけあい

ファシリテーター：上田 桂子さん

模擬演技者：中村順子さん 松田由利子さん



模擬演技に入る前に、認知症の人と私たちの感じ方の違いを映像を通して高齢になることでおこる症状や認知症の人の特徴について学びました。その後、認知症役の模擬演技者を相手に参加者2名が対応する模擬演技を行いました。

＜場面①＞ 相手が認知症だと知らずに対応する場合

ある日の午後3時頃、川上さんは夕食の買い物をしようと近所に出かけましたが、途中で帰り道が分からなくなり困っています。その時、公園のベンチに座っていたAさんに声をかけます。その時の対応は？

＜場面②＞ 相手が認知症であると 認識している場合

川上さんは何をしてもなく居間に腰掛けています。そこへ認知症サポーターのBさんがお弁当を届けて来ますが、川上さんは自分の家に見知らぬ人が来たことに不安になり、お弁当を受け取ってくれません。その時の対応は？

二つの場面設定で参加者が実際に対応をしました。その後、対応をして気付いたこと(大切にしたこと、気をつけたこと)、また、会場からの気づき、認知症役の模擬演技人の気づきを出し合い、よりよい対応の仕方を学びました。

【交流会を終えて】

実践報告では、日々の対応の中から具体的なお話で認知症への理解が深まるとともに、認知症サポーターとして特別なことをするのではなく、日常の暮らしの中で「おかしいかな」と思う気づきが大切であることと、気づいた時に声をかけることで、認知症の人にも住み慣れた町で暮らすことにつながることを、また模擬演技では実施の対応の仕方を実際に体験したことでより理解が広がりました。